

小麦の品質確保に向けた適期収穫作業に向けて

平成17年 7月21日
北海道農政部

17年産小麦は、用途別品質評価基準により、契約生産奨励金のランク区分が行われる。今後、FN(フォーリング・ナンバー)値をクリアするため、適期収穫に向けた取り組みがより一層重要になることから、高品質な小麦を確保するために以下の点に留意して作業を行う。

1 倒伏部分の別刈りによる品質確保

穂数が多いほ場では、7月上～中旬の断続的な降雨により、部分的に倒伏が見られる。倒伏した部分は、必ず別刈りとする。また、赤かび病・穂発芽が発生した小麦についても、別刈り、別乾燥とし、健全な小麦への混入を避ける。

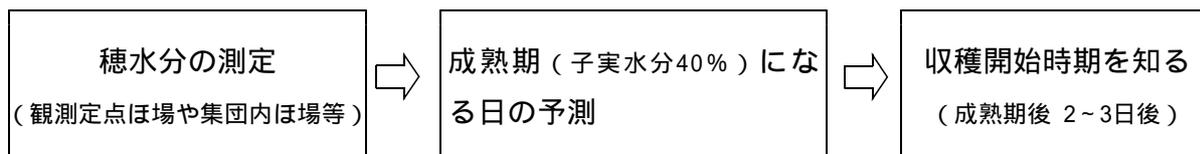
なお、登熟にムラのあるほ場では、登熟の進んだ部分から早めに刈り終えるようにする。

2 収穫適期の把握

ほ場全体の熟度と子実水分の状況を把握し、適期収穫に努める。収穫適期の把握は、出穂後の25～30日後から穂水分の測定による「成熟期予測システム」を活用して行う。

収穫適期を知るための成熟期予測システム(出穂後の25～30日後から開始)

穂水分は出穂後25～30日目以降は1日当たり約1.5%低下する。



システム活用の効果

- ・ 1～2日の誤差で成熟期を予測できる。
- ・ およその収穫時期を知り、収穫体制を整備できる。
- ・ 集団、組織内で刈り取り順が決定できる。

3 赤かび病防除の徹底

赤かび病は、出穂期以降の降雨や霧などの多湿条件で発生するので、「農作物病害虫・雑草防除ガイド」を遵守し、気象状況に注意しつつ防除の徹底を図る。(春まき小麦)

4 降雨を避けた収穫

刈り取り時期に長雨の予報が出された場合は、子実水分35%程度からの収穫を実施し、できるだけ早く乾燥施設に搬入する。

5 高品質小麦乾燥上の留意点

(1) 通風装置のある施設

- a 乾燥施設等の効率利用を図るため、子実水分が18%以下になった時点で、一時貯留を行う。
- b 一時貯留は、通風装置のある貯留ビンで行うことを原則とする。

(2) 通風装置のない施設

- a 一時貯留する場合は、できるだけ低水分とし、貯留する前に予め穀温を下げておく。
- b フレコンの場合は積み重ねないようにする。
- c 一時貯留はできるだけ短期間とし、乾燥機が空き次第速やかに仕上げ乾燥を行う。